

財松江市教育文化振興事業団
文化財調査報告書 第6集



文化財愛護
シンボルマーク

角森遺跡発掘調査報告書

1994年3月

松江市教育委員会
財松江市教育文化振興事業団

例 言

1. 本書は平成5年度において財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した角森宅地造成工事にかかる角森遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘地は次のとおりである。

島根県松江市八幡町632-9,11

3. 調査の組織は下記のとおりである。

委託者	株式会社トーヨー産業	代表取締役	古藤 正三
受託者	松江市代表	松江市長	石倉 孝昭
主体者	松江市教育委員会	教育長	諏訪 秀富
事務局	同上	生涯学習部長	中西 宏次
		文化課長	村松 榮
		文化財係長	岡崎雄二郎

調査実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長 吉岡 俊雄

調査担当者 同上埋蔵文化財課 調査員 瀬古 諒子

調査補助員 同上 調査補助員 北島 和子

4. 調査の実施に当たっては、株式会社トーヨー産業代表取締役古藤正三氏の協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

5. 本書で使用した遺跡の地形図及び遺構の実測図の方位は磁北を示す。

6. 出土遺物については、遺物の種類毎に通し番号をつけ、実測図と写真の番号が対応するようにした。

7. 本書の執筆、編集は瀬古が行った。

8. 出土遺物及び実測図、写真はすべて松江市教育委員会にて保管している。

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会(現文化庁)が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗拱、すなわち斗と拱の組み合わせによって全体で軒を支える檼木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

目 次

I. 調査に至る経緯	-----	1
II. 位置と歴史的環境	-----	1
III. 調査の概要	-----	5
1) 土層の堆積状況について	-----	6
2) 遺構について	-----	6
3) 遺物について	-----	8
IV. 結 び	-----	10



角森遺跡位置図

I. 調査に至る経緯

角森遺跡は松江市八幡町字角森に所在し、標高15m前後の低丘陵上の緩やかな南向き斜面に位置している。現状は原野であったが一部は畑地として耕作されていた模様である。

平成元年度にさんもく工業がこの地一帯に角森団地造成工事を計画し、同年8月松江市教育委員会に分布調査を依頼したので、それを受けて9月に分布調査を行なった。さらに10月、11月に試掘調査を実施した結果、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物包含層が発見され、角森遺跡と命名された。

平成3年度に至り、株式会社トーヨー産業が角森遺跡を西端に含む一帯に角森宅地造成工事を計画したので、同年11月市教委による試掘調査を行い、遺跡の範囲がさらに東方に広がることが判明したため、開発予定地内の全面発掘調査が必要となったものである。

II. 位置と歴史的環境

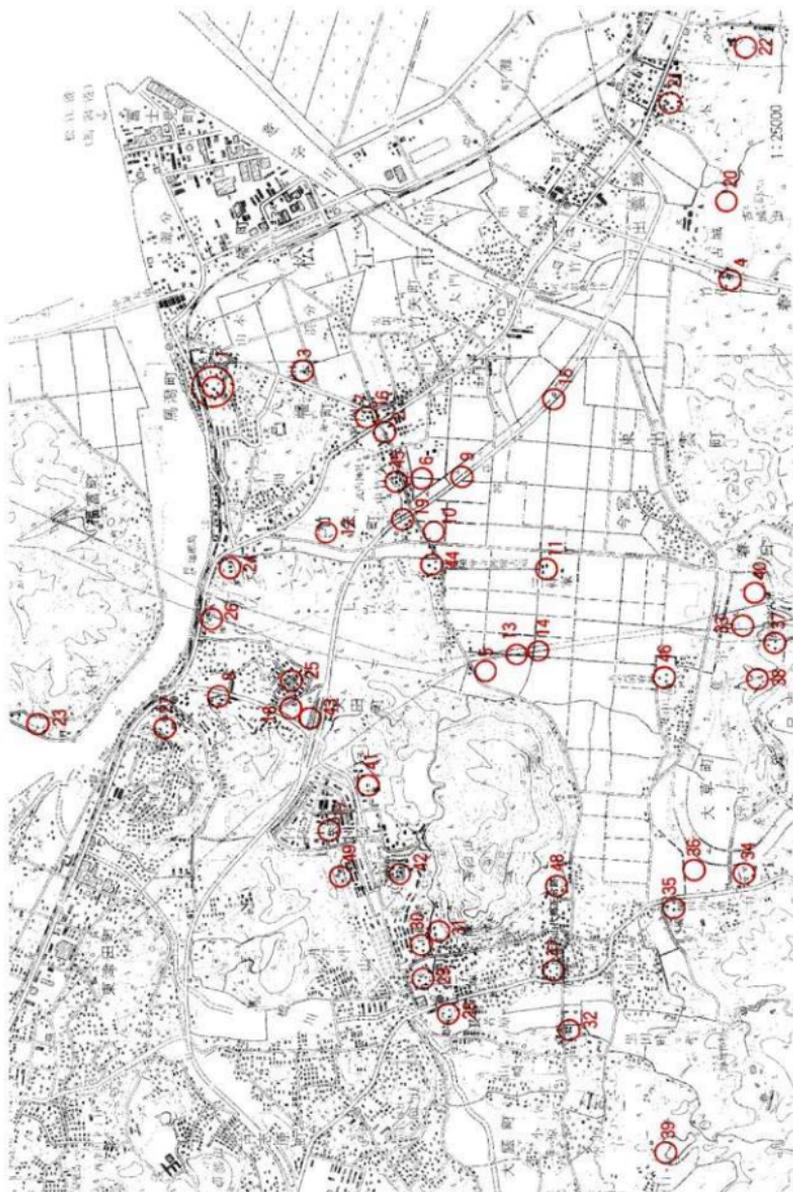
角森遺跡は松江市市街地の東方、松江市八幡町字角森632-9、11に所在し、矢道湖と中海を結ぶ大橋川の南岸ぞいの低丘陵南向緩斜面に位置している。標高は15m前後である。遺跡の南西には意宇平野の水田地帯が広がり、その周辺には多くの遺跡が点在している。

周辺の縄文時代の遺跡としては、竹矢小学校校庭遺跡、さっべい遺跡、竹ノ花遺跡、才塚遺跡、法華寺前遺跡、的場遺跡、保地遺跡などが知られており、縄文時代前期にはこの地域で人々の暮らしが始まっていたことがうかがわれる。

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と複合する竹矢小学校校庭遺跡、保地遺跡等のほか、布田遺跡、平浜八幡宮前遺跡、三軒屋遺跡などが従来から知られていたが、中でも布田遺跡では近年の調査により前期から中期にかけての溝状遺構を中心とする数多くの遺構や遺物が検出され、集落に関する多くの貴重な資料が提供されている。また長峯遺跡では中期末から後期前半にかけての堅穴住居跡が調査されている。意宇平野における上小紋・向小紋遺跡、夫敷遺跡では弥生時代後期前半の灌漑施設や水田跡が検出されており、布田遺跡に続いて周辺における集落の存在を想起させてくれる。この時期の墳墓はまだ知られていないが、後期後半になると的場土墳墓や来美四隅突出墳墓、間内越遺跡の四隅突出型墳墓などが作られ、有力首長の存在がうかがわれるようになる。

周辺の古墳時代前期の遺跡としては土墳墓20余基を検出した中竹矢遺跡がある。また意宇平野東辺の丘陵上には古城山2号墳、大木権現山1号墳、寺床1号墳などの前期古墳が知られている。

古墳時代中期になると大橋川沿いの丘陵一帯には矢道湖と中海を結ぶ水運を掌握していたと考えられる有力首長の大型古墳が次々と築造される。魚見塚古墳、竹矢岩舟古墳、井ノ奥4号墳、手間古墳、石屋古墳などである。中期後葉頃には大橋川支流の馬橋川中流域の山代・大庭地区に大庭鶏家古墳が



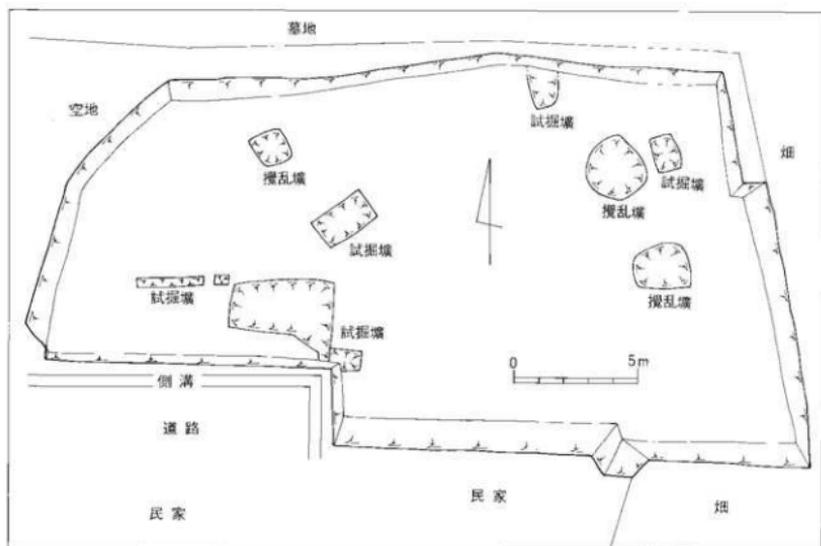
第1図 周辺の遺跡

出現し、続いて出雲地方最大規模の山代二子塚古墳、山代方墳、永久宅後古墳、東瀬寺古墳、古天神古墳、御崎山古墳、岡田山1号墳、岩屋後古墳などが築かれて、後期古墳は山代・大庭地区から大草周辺を中心に営まれて行く。同時に東百塚・西百塚古墳群や後谷・荒神谷古墳群などの群集墳や安部谷横穴群、十王免横穴群、狐谷横穴群などの横穴墓が多数作られる。一方これらの古墳や横穴墓を作った人々の集落跡についてはあまりよく分かっていないが、最近の調査例として矢田平所遺跡では古墳時代中期頃の竪穴住居跡とそれに付随する掘立柱建物2棟が発見されている。

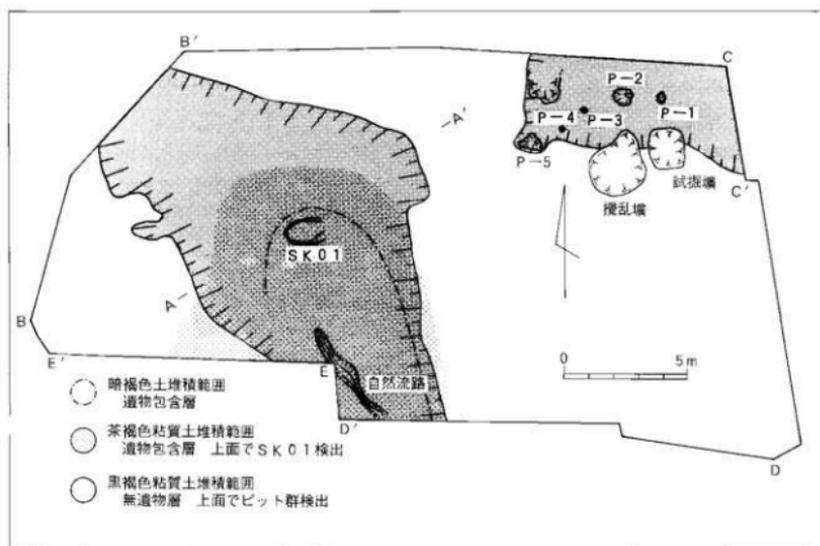
奈良時代になると区分寺、国分尼寺、出雲国府、山代郷正倉跡などの官寺、官衙が造営され、四王寺跡、来美庵寺跡などの私寺に見られるように地方豪族の活動も活発に行われていたことが知られる。

第1表 周辺の遺跡一覧表

No	名 称	概 要	No	名 称	概 要
1	角森遺跡	弥生包含層(土器他)	26	手間古墳	前方後円墳, 埴輪
2	竹欠小学校校庭遺跡	縄文土器, 弥生土器他	27	石屋古墳	方墳, 埴輪, 造り出し
3	さっぺい遺跡	縄文土器	28	大庭鶏塚古墳	方墳, 埴輪, 造り出し
4	竹ノ花遺跡	縄文土器, 弥生土器他	29	山代二子塚古墳	前方後方墳, 埴輪, 須恵器
5	才塚遺跡	縄文土器, 石斧	30	山代方墳	方墳, 石棺式石室
6	法華寺前遺跡	縄文土器	31	永久宅後古墳	石棺式石室, 埴輪
7	釣場遺跡	石匙	32	東瀬寺古墳	前方後円墳, 埴輪
8	保地遺跡	縄文土器, 弥生土器他	33	古天神古墳	前方後方墳, 石棺式石室
9	布田遺跡	集落跡, 漆, 銅形土製品, 管玉未製品	34	御崎山古墳	前方後方墳, 横穴式石室, 石棺
10	平浜八幡宮前遺跡	弥生土器	35	岡田山1号墳	方墳, 横穴式石室, 須恵器他
11	三軒屋遺跡	弥生土器, 土師器	36	岩屋後古墳	石室
12	長峯遺跡	竪穴住居跡(弥生), 土塚墓(平安)	37	東百塚古墳群	64基以上の円墳, 方墳
13	上小紋遺跡	水田灌溉施設(弥生), 木製品他	38	西百塚古墳群	42基以上
14	向小紋遺跡	水田跡(弥生)	39	荒神谷・後谷古墳群	16基以上, 方墳, 須恵器他
15	夫敷遺跡	〃	40	安部谷横穴群	整正平入家形横穴構造
16	釣場土塚墓	土塚墓(弥生)	41	十王免横穴群	組合式石棺, 陰刻壁画他
17	来美壇丘墓	四隅突出型墳丘墓	42	狐谷横穴群	17穴以上
18	岡内越1号墓	〃	43	矢田平所遺跡	竪穴住居1, 掘立柱建物2
19	中竹矢遺跡	土壇墓20余基(古墳前期)	44	出雲湯分寺跡	南門, 中門, 金堂, 講堂, 僧坊, 瓦他
20	古城山2号墳	方墳, 内行花文鏡, 土師器	45	出雲國分尼寺跡	瓦, 墨書土器, 施釉陶磁器他
21	大木権現山1号墳	方墳, 土師器	46	出雲國府跡	四面廂建物, 墨書土器, 木簡, 瓦他
22	寺末1号墳	方墳, 土師器	47	山代郷正倉跡	倉庫跡, 焼米
23	魚見塚古墳	前方後円墳	48	四王寺跡	瓦他
24	竹矢岩舟古墳	前方後方墳, 舟形石棺, 埴輪	49	来美庵寺	礎石, 瓦他
25	井ノ奥4号墳	前方後円墳			



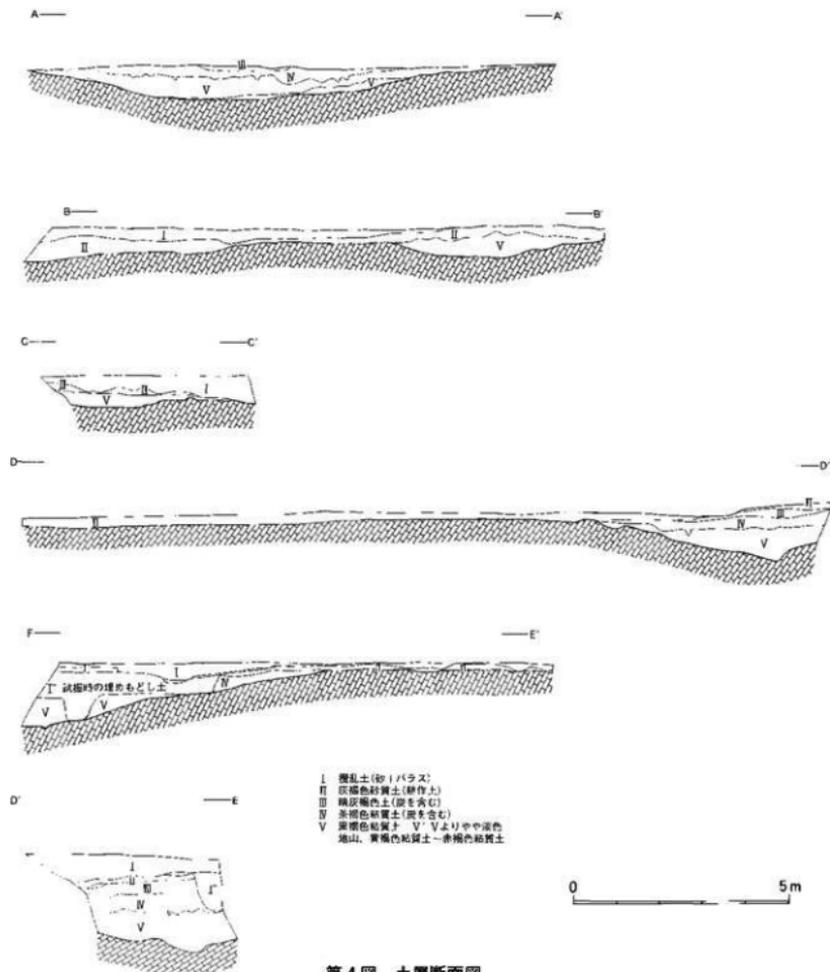
第2図 調査前全体図



第3図 調査後全体図

Ⅲ. 調査の概要

試掘調査時に検出された遺物包含層がかなり深い位置（表土下20~40cm）にあったため、表土層を重機で除去した後、掘削作業に入った。



第4図 土層断面図

調査の結果、土壌1（SK-01）とその上下の遺物包含層（弥生時代後期）、ビット5穴（時期不明）を検出した。

1) 調査区内の土層の堆積状況について

調査区の多くの部分においては耕作土の下はすぐ地山となっていたが、調査区北東の一部分と、調査区西北壁から南壁につながる幅5～10mの緩やかなU字状に窪んだ部分に深さ70～140cmの堆積層が見られた。

第1層（攪乱土） 本調査までの期間、盛土をして平坦に整地され駐車場になっていたため、砂を主体とした攪乱層が、北側では薄く、南側では厚くなっている。

第2層（灰褐色砂質土） 調査区全体を10～50cmの厚みで覆っている耕作土である。遺物はなかった。

第3層（暗灰褐色土） SK-01内外およびその南側の試掘域周辺にのみ部分的に堆積していた。厚みは5～20cmを測る。土器（Y1～10）、鉄器（F-1）、石器（S-1）などが出土している。

第4層（茶褐色粘質土） 第3層よりもやや広い範囲に5～30cmの厚みで堆積していた。上面でSK-01を検出している。出土土器は大部分試掘調査時のものである。（Y-11～14）

第5層（黒褐色粘質土） 上記U字状に窪んだ部分の最下層に10～70cmの厚みで堆積していた。固く締まった粘質土で、遺物はふくまれていなかった。また調査区北東部にも20～70cmの厚みで堆積しており、上面からビット5穴を検出している。

地山面は黄褐色～赤褐色粘質土であった。遺構はなかった。

2) 遺構について

① SK-01 第4層（茶褐色粘質土）上面で検出した。平面形は1×1.5m以上の長円形をなすものと思われる。東側は試掘域によって切られているので不明である。深さは12cm前後と浅く、内部には暗灰褐色土とやや暗い褐色土が堆積していた。出土遺物は弥生時代後期前半頃の甕（Y-1～4）や鉢（Y-5）、やりがんなの先端部（F-1）、ススの付着した甕胴部の破片（Y-10）などである。

② ビット群 第5層（黒褐色粘質土）上面で検出した。埋土はいずれも淡褐色砂質土で炭を少量含む。これらは大きさも深さも形もまちまちである。

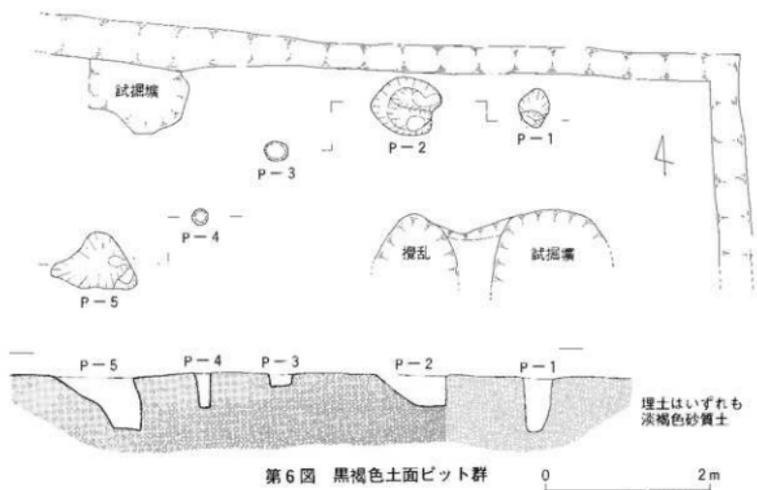
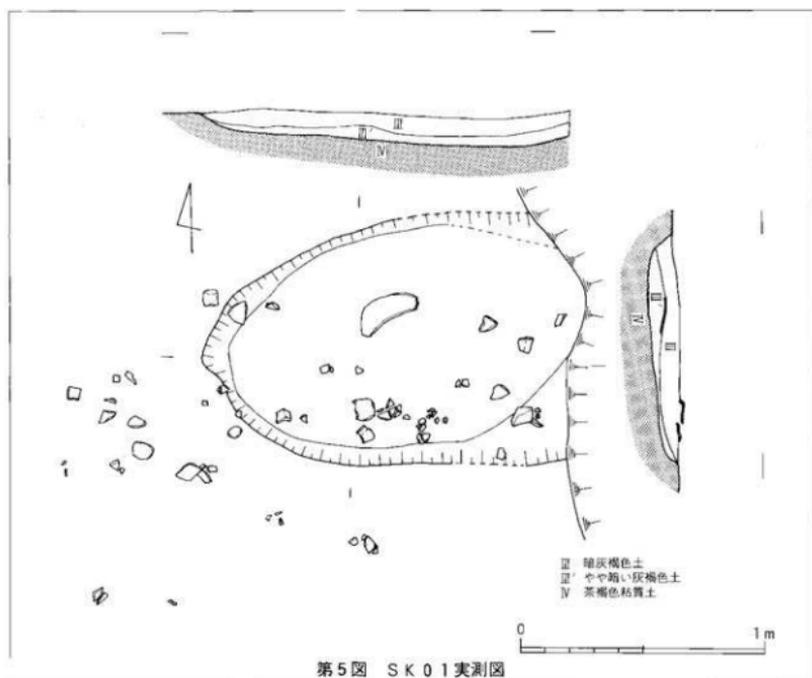
P-1 上端径35×48cm、下端径15×15cm、深さ65cmを測る。深さ12cmのところから弥生土器の小片が出ている。

P-2 上端径85×70cm、下端径35×15cm、深さ38cmを測る。深さ20cmのところから突帯付きの土器片（Y-15）が出ている。弥生土器とおもわれる。

P-3 上端径30×23cm、下端径24×27cm、深さ15cmを測る。遺物はなかった。

P-4 上端径20×20cm、下端径13×14cm、深さ43cmを測る。遺物はなかった。

P-5 上端径95×70cm、下端径32×14cm、深さ65cmを測る。遺物はなかった。



3) 遺物について

弥生時代後期を中心とした土器片、鉄器1、石器1などが出土したが、総量はコンテナ約1箱分で形状のわかるものは10数点であった。

Y-1は甕の口縁部である。口径15.8cm。口縁端部は内傾し拡張して、外面に凹線文が3条施されている。内面は頸部以下にヘラケズリが行われる。

Y-2は甕である。口径11.7cm。口縁端部外面の凹線文は2条施される。胴部の張りは少ない。内面は頸部以下がヘラケズリされる。

Y-3は甕である。口径17.0cm。口縁端部は内傾し拡張して、外面に凹線文が3条施されている。胴部はよく張り、外面に斜行刺突文が巡る。内面は頸部以下にヘラケズリが行われる。頸部にススが付着している。

Y-4は内傾する口縁端部の小片である。外面に凹線文が5条施される。

Y-5は鉢である。口径7.0cm。口縁端部は内傾しやや拡張気味でヨコナデで仕上げる。胴部は外面タテハケ、内面ヘラケズリが行われ、外面中程に列点文が施されている。

Y-6～9は底部片で、平底である。底径は6が6.2cm、7が5.0cm、8が4.6cm、9が4.0cmを測る。6～8はいずれも外面にはタテハケ、内面にはヘラケズリが施されている。9は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリである。

Y-10は胴部片で、外面にはハケメ、内面にはヘラケズリが施されている。外面には一面にススが付着している。

Y-11, 13は壺の口縁部である。11の口径19.5cm。口縁端部は内傾し拡張して、外面に凹線文2条が施される。

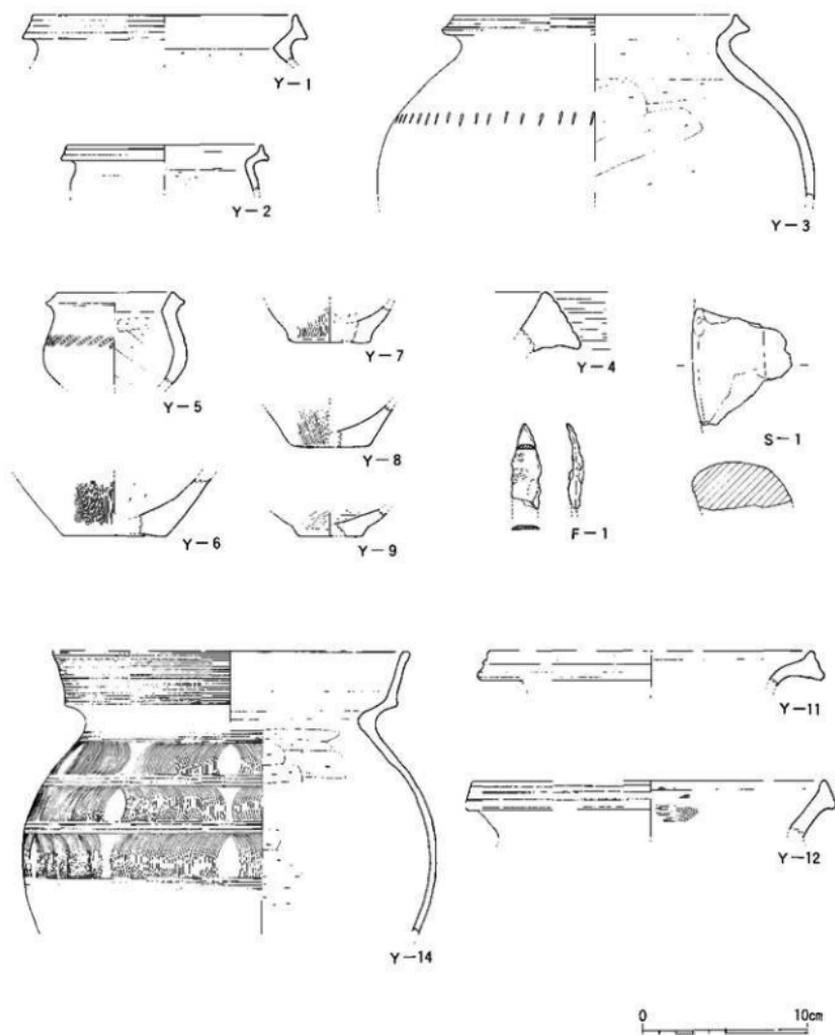
Y-12は甕の口縁部と思われる。口径21cm。内傾する口縁端部外面には凹線3条が残る。

Y-14は複合口縁の甕である。口径21.6cm。口縁部は外傾して幅広く立ち上がり、外面に19条の平行直線文が施される。胴部外面にはくし状工具による文様が3段にわたって施され、各段の上下には4条の平行沈線文が巡る。内面は頸部以下にヘラケズリが行われる。外面の所々にはススが付着している。よく似た文様を持つ甕が横田町の日焼田遺跡(杉原清一・東森市良「横田町日焼田遺跡の調査」島根県文化財愛護協会『季刊文化財』36号)で出ているが、こちらは貝殻腹縁によるものようである。

F-1はやりがんなの先端部である。刃部長2.5cm、身部幅1.5cm、残存長5.2cmを測る。刃部は反りもち、断面形は刃部身部ともに三日月形である。

S-1は磨製石斧の破片と考えられる。

これらの出土遺物のうち、1～5、11～13はおおむね弥生時代後期前半のものと思われ、14のみが後期後半に属するものと考えられる。Y-3、10、14などには広範囲にススが付着しているので、煮沸に使われたものであろう。



第7图 遗物实测图

Ⅳ. 結 び

調査当初は弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡であろうと予測していたのであるが、調査の結果では弥生時代の後期前半から後半にかけての土器が出土し、古墳時代の遺物は見られなかった。試掘調査時に土師器とされていたのは、Y-14のいわゆる的場併行期（正岡陸雄・松本岩雄編「弥生土器の様式と編年」山陽・山陰編ではV-3様式）のものであった。

SK-01は浅い土壌状の落ち込みといったものでその性格は不明であり、その内外で出土している土器群よりもSK-01の基盤層である茶褐色粘質土層で出土している土器のほうが新しいことから、遺物は流れ込みによるものと判断される。

調査区外の北から北西部は現在は墓地になっているが、この丘陵の尾根筋にあたるので、そこに弥生時代の何らかの遺構（住居跡等）があって遺物が調査区内に流れ込んだものと考えられるのである。

第2表 出土遺物一覧表

No	種 類	器 種	法量(cm)	形態・手法・文様の特徴	出土層位・その他
Y-1	弥生土器	甕	口径15.8	内傾する口縁端部に凹線文3条,内面頸部以下ヘラケズリ	SK-01内暗灰褐色土
Y-2	"	"	" 11.7	" " 2条, "	第3層暗灰褐色土
Y-3	"	"	" 17.0	" " 3条, " 肩部にヘラによる斜行刺突文	SK-01内暗灰褐色土 炭化物付着
Y-4	"	"		内傾する口縁端部に凹線文5条	
Y-5	"	鉢	" 7.0	内傾する口縁端部,胴部に列点文,内面頸部以下ヘラケズリ	SK-01上暗灰褐色土
Y-6	"	底部	底径 6.2	外面タテハケ,内面ヘラケズリ	"
Y-7	"	"	" 5.0	" , "	"
Y-8	"	"	" 4.6	" , "	"
Y-9	"	"	" 4.0	外面ヘラミガキ,内面ヘラケズリ	第3層暗灰褐色土
Y-10	"	胴部		外面ハケキ 内面ヘラケズリ	SK-01内暗灰褐色土
Y-11	"	壺	口径19.5	内傾する口縁端部に凹線文2条	第4層茶褐色粘質土
Y-12	"	甕	" 21.0	" " 3条	"
Y-13	"	壺		" " 3条	"
Y-14	"	甕	" 21.6	やや外傾する複合口縁外面にくし状工具による平行直線文,肩~胴部にくし状工具による文様が3段にわたって施される。内面頸部以下ヘラケズリ	" 炭化物付着
Y-15	"	"		外面に突帯貼り付け	黒褐色土上面ピット
F-1	鉄 製 品		刃部長2.5 身部幅1.5	刃部は反りをもち、断面形は刃部、身部ともに三日月形。 残存長5.2cm	SK-01内暗灰褐色土
S-1	石 器	石斧		磨製石斧	第3層暗灰褐色土

圖

版

図版 1

調査前(西から)

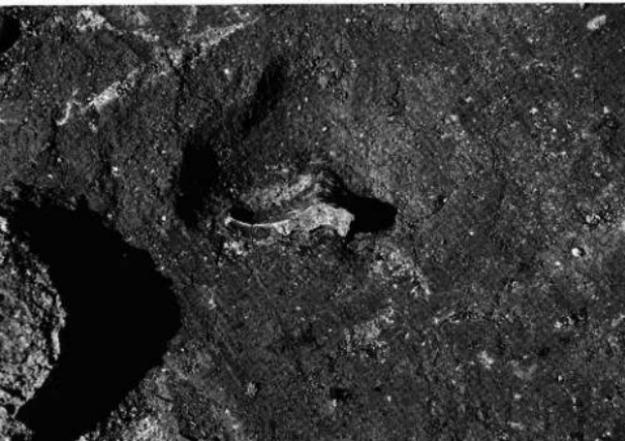


SK01検出状況



同上 遺物出土状況





SK01遺物出土状況



同上



SK01完掘後



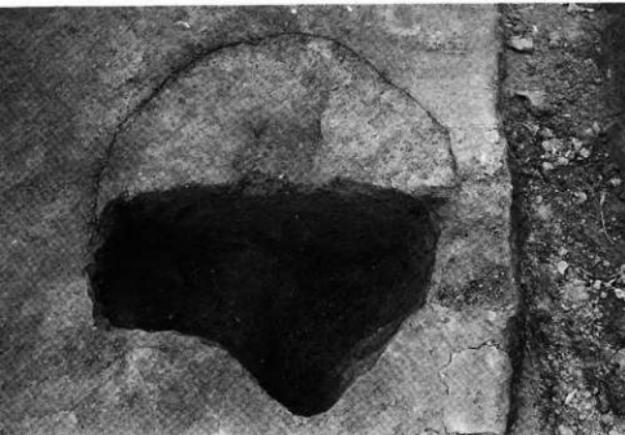
SK01の位置



黒褐色土面ビット群



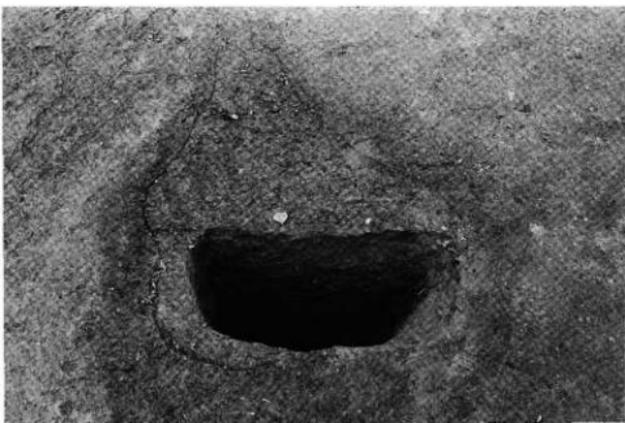
同上 P-1



黒褐色土面P-2



同上 P-4



同上 P-5

図版 5



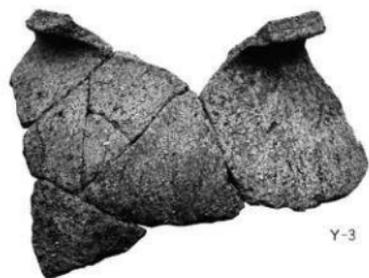
調査区南部(D'E)南北土層断面



調査後(東から)



調査後(西から)



Y-3



Y-1



Y-5



Y-8



Y-7



Y-6



Y-10



F-1



Y-14



S-1



Y-14



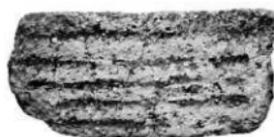
Y-15



Y-11



Y-12



Y-4



Y-13

角森遺跡発掘調査報告書

1994年3月

発行 財団法人松江教育文化振興事業団

印刷 有限会社 谷口印刷

松江市母衣町89